

2024 Spring

NO.486

AAR News



特集：能登半島地震 緊急支援 被災した皆さんの心を癒すサポート

避難所で被災者の皆さんから話を聞くAARの生田目充=石川県輪島市で2024年1月11日

AAR ニュース 2024 春号

- p2-4 特集：能登半島地震 緊急支援
- p5 活動レポート：パキスタンインクルーシブ教育推進事業 駐在員だより：ミャンマー
- p6-7 活動レポート：サヘル・ローズさん ウガンダ訪問
- p8-9 インタビュー：水野 泰平さん（シサム工房代表）
- p10-11 インフォメーション
- p12 スタッフ紹介：堀尾 麗華（東京事務局 支援事業部）

since
1979

45th

想いを、支援に。



AAR Japan

認定NPO法人 難民を助ける会



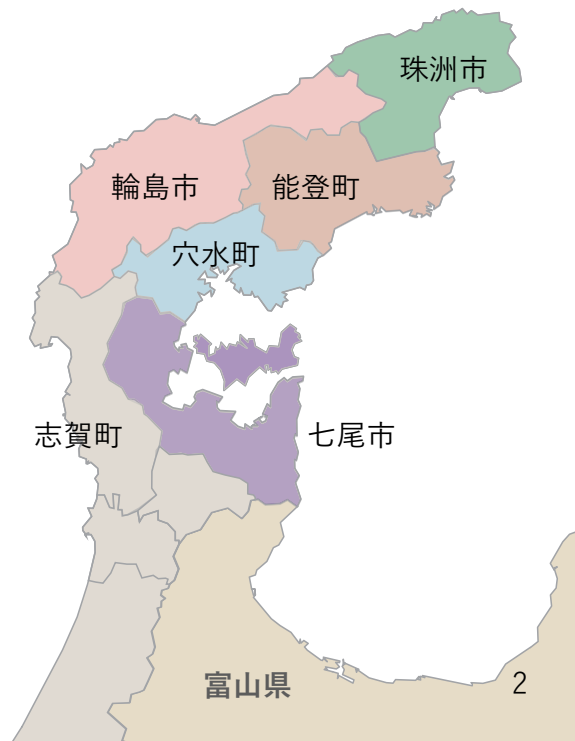
特集 能登半島地震 緊急支援 被災した皆さんの心を癒すサポート

1月1日に発生した能登半島地震は、石川県を中心に甚大な被害をもたらしました。住宅被害は11万287棟に上り、現在も9千人を超える方々が避難生活を送っています（3月19日現在）。AAR Japan [難民を助ける会] 緊急支援チームは、発生翌日2日に被災地に向けて出動し、3日に緊急支援を開始。炊き出しや福祉施設・避難所への食料・衛生用品などの物資配付、マッサージや入浴支援、外国人居住者支援など、現地の行政や関係団体と連携しながら、必要とされる支援を続けています。現地から報告します。

1月3日、壊滅的な被害を受けた石川県珠洲市の若山小学校に設けられた避難所で、360食の豚丼を調理して提供しました。AARはパートナーの認定NPO法人ピースプロジェクト（代表・加藤勉AAR理事）と協働し、炊き出し支援を開始。その後も東本願寺ボランティアチームやNPO法人BOND&JUSTICEと風組関東（いずれも東京都）などの他団体と連携して輪島市、能登町で作り立ての食事を提供しています。加藤理事は「野菜や肉類をふんだんに使うなど栄養バランスに気を配っています。厳しい状況で頑張っておられる皆さんに、温かい手作りの料理をお出しすることが何よりも大事」と話します。

「朝晩冷え込む中、温かい食事を出してもらって本当にありがたい」「正月早々の震災に誰もがショックを受けています。こうした支援が大きな支えです」。

発生2日後から炊き出し



能登半島地震 AARの主な支援内容

炊き出し



現地で活動する5つのパートナー団体と連携し、温かい食事やお弁当を10万8,348食提供しました(3月21日時点)

料理を提供する加藤勉AAR理事
=石川県珠洲市で1月3日

炊き出しのメニュー例

生姜焼き、かつ丼、牛丼、野菜カレー、雑炊、おにぎり、水餃子、春雨スープ、豚汁、うどん、肉じゃが、チャーハン、お好み焼き、焼きそば、いも煮、シチュー、ラーメン、さつまいもご飯、ミネストローネ、野菜スープ、けんちん汁、麻婆丼、ホルモン鍋、おでん、天丼など

福祉施設・避難所への物資提供

石川県内の障がい者・高齢者施設80施設を対象に、ニーズに沿った支援物資を届けているほか、全国市長会と連携して携帯用トイレ2万セットや寝袋や大型ブランケットを石川県に提供しました。



提供した支援物資例

飲料水、レトルト食品、缶詰、野菜、果物、菓子、調味料、経口補水液、栄養ゼリー、簡易トイレ、トイレ用テント、ウェットタオル、電池、清掃用品、カセットボンベ、カイロ、石油ストーブ、水用ポリタンク、無水シャンプー、歯ブラシ、下着など

コミュニティ支援



小規模な自主避難所に、食料や衣類、衛生用品、洗濯機などの家電を提供しているほか、マッサージや入浴支援を実施。また、生活再建に不安をもつ住民のために、弁護士による生活再建相談会を開催しています。

外国人被災者支援

インドネシアやベトナムなどから来日した技能実習生などに、飲料水や食文化に合わせた食材などを届けているほか、行政などの支援情報を提供しています。



地元有志グループをサポート

2月からは輪島市内の被災者ら地元有志グループ「ラトリエ炊き出し」のサポートを開始しました。「ラトリエ炊き出し」はフレンドレストラン『ラトリエドゥノト』のシェフ池端隼也さんが中心となって、一日約1500食を近隣の在宅避難者や避難所に身を寄せる方々に毎日提供しています。

炊き出しメンバーに登録しているのは被災住民を含む25人。池端さん自身もレストランと自



「野菜たっぷりシチュー」を提供するラトリエ炊き出しのメンバー=石川県輪島市で2月16日

宅が倒壊し、キャンピングカーで生活しています。池端さんは「自宅で避難している人、未だに車中泊している人も多いため、避難所だけでなく、その泊している方々にも温かい食事を届けたい。今は皆で力を合わせて乗り切るしかありません」。そして、

「いつになるか分かりませんが、やむを得ず輪島市外や県外に避難した人たちが戻ってくる時に、輪島を出たことが申し訳ないという気持ちにさせないように温かく迎えて、一緒に良い街を再興していきたい」と付け加えました。

メンバーの女性は「地震発生直後は家族で高台に避難し、津波警報が注意報に切り替わった後、自宅近くで車中泊しました。地元の神社で炊き出しを手伝っている時、知人からラトリエ炊き出しに誘われました。自宅は一部損壊で物が散乱しており、中学生の娘も私も家にいてもつらいのですが、この活動に参加することで笑顔になれます」と話します。

炊き出しを受けとった近隣住民は「今日も寒さが厳しくて、こうして温かくて野菜がたくさん

ん入っている食事をいただいで本当に助かって
います」と笑顔を見せました。

AARは、3月21日までに計10万8348食
を提供しています。石川県では約1万3000
戸が断水状態にあります（3月19日時点）。避難
所はもちろん家庭での調理は難しく、炊き出し
は今後必要とされます。

お風呂カーで入浴支援

「久しぶりに自分の家の風呂に入っているよう
で本当に気持ちよかったです。ありがとうございます。」

輪島市町野町若桑避難所に避難している上谷
庄司さんは2月21日、AARが支援するトラッ
クを改造した移動式風呂カーでの入浴を30分以
上堪能した後、笑顔で話しました。

被災地ではライフラインや道路などのインフラ
が大きな被害を受けました。特に上下水道の被



(上)トラックを改造した移動式お風呂カー
(下)お風呂カーの湯船に浸かる利用者(2月21日)
=石川県輪島市町野町

害は大きく、広い地域で断水が続いています。

こうした地域の人々は自衛隊や宿泊施設が提
供する浴場を利用していますが、時間帯や利用
者数に制限が設けられていたり、場所が離れて
いたりするため、希望通りに入浴できるわけ
はありません。AARは避難所や福祉施設から
の「お風呂に入りたい」「お風呂に入れてあげ
たい」との切実な声を受け、NPO法人ふくい
災害ボランティアネット（福井県）、NPO法
人チーム二本松（福島県）と連携して、2月中
旬よりお風呂カーの運用を開始しました。

お風呂カーは家庭用の一般的な浴槽とシャ
ワーを備えています。1トンの水を積載でき
るほか、水のろ過装置も搭載しており、水の
確保が難しい場所ではろ過・消毒した沢の水
を沸かして使うこともできます。

入浴介助が必要な高齢者や障がいのある
方々にも利用いただいています。

3月3日に知的障がいのある娘さ
んと利用された女性は、「自衛隊の
お風呂には行けなかったのを助かり
ました。家の風呂と同じくプライバ
シーがあるから娘も喜んでます」と
話されました。

小規模な避難所では、お茶会や理
学療法士によるマッサージ支援を行
い、心身ともにリラックスしていた
だけの時間を提供しています。

石川県内の80施設をサポート

また、AARは高齢者施設や障がい者施設、
小規模避難所への物資配付を行っています。1
月下旬からは石川県内の福祉施設とのネット
ワークを持つNPO法人「石川バリアフリーツァー
センター」（金沢市）と連携し、高齢者・障がい
者施設80カ所へのサポートを開始。発災直後は
食料や飲料水、衛生用品、下着などの衣類を主
にお届けしました。断水が続く現在は、ドライシャ
ンプーや無水歯ブラシなどが大変好評です。

復旧の見通しが立たない中、被災した皆さん
の心と身体は不自由な避難生活によって大きな
負担を強いられています。AARは避難生活を
送る皆さんの声にしつかりと耳を傾け、疲労を
少しでも癒すことができるよう支援を続けてま
いります。



石川県穴水町の障がい者支援施設「石川県精育園」
に株式会社モンベルから提供いただいた簡易トイレ
と小型テントをお届け(1月9日)



東京事務局 支援事業部
生田目 充

障がい者 支援

パキスタン インクルーシブ教育推進事業 子どもたちを支える先生の学び合い

パキスタンでは就学年齢の子どもの44%が通学できていません。特に障がい児の就学率は5%と著しく低いため、AARは2019年以降、校舎やトイレのバリアフリー化、教員や地域住民への障がい理解の研修などを通じて、計13校で障がい児の教育環境の整備に取り組んできました。2023年11月、AARが支援する9校の教員とともに、過去に支援を受けた学校を視察しました。

「アーマッドさんは話すことはできませんが、毎日学校に来て楽しく過ごしています」と車いすの少年を



アーマッドさん(左)と担任の先生、クラスメイト

紹介してくれたのは、ハイバル・パフトゥンハー州、ハリプール市内の男子小学校の先生。アーマッドさん(13歳)は、AARの支援を受けて就学し、低学年クラスに通っています。同校は在校生603人のうち16人が障がい児で、少しずつ障がい児の受け入れが進んでいました。同市近郊の女子小学校を訪問した際は、先生たちが意見交換を行い、「障がい児の就学に保護者の理解が得られない」「障がい児との接し方を教えてほしい」といった質問に対して、経験のある教員たちがアドバイスをしました。また、スロープやバリアフリートイレなどの施設の整備・使用状況を確認しました。

この視察では、他校から訪問した教員はもちろん受け入れ側にも大きな学びがありました。自分たちの取り組みを振り返り、説明することは活動の定着につながります。

AARが支援を開始して約4年、障がい児を支える人材は着実に増えていきます。今後も様々な工夫を重ねながら、障がい児が学びやすい環境を整えてまいります。

駐在員だより 美味しく、辛くて、やさしい料理@ミャンマー



種類が豊富なミャンマーの家庭料理

ミンガラバー(こんにちは)! ミャンマーのパアン事務所に赴任して1年、この国が大好きになった私が、ミャンマー料理の魅力をご紹介します。

ミャンマー料理は、ミャンマー独自の食文化に加え、隣接するインドや中国、タイなどからの影響を受け、味も種類も豊富にあります。そしてそのどれもがとても美味しいです。

魅力のひとつは「辛さ」。ミャンマー人にとって唐辛子は欠かせないことのできないスパイスで、代表的なミャンマー料理「モヒンガ」(麺料理)など、多くの料理に大量の唐辛子が使われています。レストランで注文する際、唐辛子の量を「ネネ」(少し)と伝えても、毎回大量の汗をかきながら食べることになります。

辛い料理もあります。スタッフや友人宅を訪れた際、辛い、優しい味の家庭料理を振る舞ってくれます。肉や魚介類、野菜などがバランスよく味付けされ、栄養も豊富です。本当に美味しいので、おかわりを「ネネ」と伝え、お茶碗2杯分ほどの白ご飯がやってくることもしばしば。食事をともにするミャンマー人の人柄の良さも、ミャンマー料理を美味しく感じる理由のひとつです。

お近くにミャンマー料理店がありましたら、ぜひ皆さんも「ネネ」というミャンマー語を使いながら、美味しい料理をお楽しみください。



パアン事務所 横尾 和磨

活動レポート

サヘル・ローズさんが出会った ウガンダ難民居住地の子どもたち



チャングワリ
難民居住地

Uganda

世界は次々と発生する紛争や災害のニュースであふれています。
その一方で、アフリカでは多くの難民が長年厳しい環境に置かれたまま、なかなか注目されません。
AAR Japan [難民を助ける会] が支援活動続けるウガンダのチャングワリ難民居住地もそのひとつ。
俳優サヘル・ローズさんと一緒に2月に現地を訪問しました。



ウガンダ西部のチャングワリ難民居住区、モンバサ初等教育校で子どもたちに囲まれるサヘルさん =2024年2月21日

AARの事業地を訪問

イラン出身のサヘルさんは、戦争孤児だった自らの経験からバングラデシュやイラクなど各地の孤児院を訪ねたり、個人的に支援したりしています。「アフリカもいつか訪ねてみたいと思っていました」と話します。

ウガンダ訪問は2月15日から25日まで。AARが支援するチャングワリ難民居住地には主に隣国のコンゴ民主共和国から逃れてきた約13万の人々が暮らしています。サヘルさんは、居住地内の初等教育校（日本の小学校相当）3校、中等教育校（中学・高校相当）1校と、難民受け入れ地域の初等教育校1校、中等教育校1校を訪問しました。うち3校では、1人ノート4冊、鉛筆やペン2本の学用品配付※をお手伝いいただきました。

初等教育校の子どもたちは元気いっぱい。どこの学校でも歌やダンスで歓迎してくれました。しかし、よく見ると靴を履いていない子や破れた服を着た子が大勢います。サヘルさんは「こんなにたくさんの子たちが教室に詰め込まれているなんて」と目を丸くしていました。1教室あたりの児童数は平均約100人、なかには120人超の学校もあります。

※2024年1月から実施したAARチャリティチョコレート「ウガンダキャンペーン」の純益を活用しています。



3人掛けの机に5人が座り、子どもで満員の教室

高学年になるほど学校に来なくなる子が増え、最高学年（7年生）までに男子は3割強、女子は2割になってしまっています。つまり低学年の教室は平均以上に込み合っています。

中途退学の理由は、貧困による児童労働、早期結婚、学費や学用品の負担、学校が遠いことなどです。教科書も足りず、子どもたちは教科書の内容をノートに写して勉強します。そのためノートと鉛筆がないと勉強についていけず、登校しなくなってしまうのです。

サヘルさんは「私は戦争で両親と12

人のきょうだいをなくし、8歳まで孤児院で育ちました。本当の名前も誕生日も分かりません。皆さんの中にも私と同じような人がいるかもしれませんね。私は教育を受けて大人になり、皆さんに会いに来ることができました。皆さんも決してあきらめないで学校に来て。もし悪口を言われても『自分だけだ』なんて考えないで。教育は必ずあなたの力になります」と語りかけ、子どもたち一人ひとりにノートと鉛筆を手渡しました。

地雷廃絶運動のリーダーと対談

ウガンダでは、自らも地雷被害者であり、地雷廃絶と地雷被害者の支援のため国際的に活動しているマーガレット・アレチ・オレチさんとも対談しました。マーガレットさんは、1997年にノーベル平和賞を受賞した地雷禁止国際キャンペーン（ICBL）の大使も務めています。

サヘルさんがマーガレットさんに会うのは初めて。マーガレットさんは1998年に乗っていたバスが地雷を踏んで右足を失い、そのために仕事や家を失ったこと、5人の子どものために頑張ったこと、自分に起きたことが



すっかり打ち解けたマーガレットさん（左）とサヘルさん

他の人に起きてほしくない一心で証言を続けていることなどを語りました。

サヘルさんが「これから私たちはどのようにアフリカの地雷被害者の方々や難民を支援していけばいいのでしょうか」と問うと、「施しではなく、人々の能力強化を支援してほしいです。AARはこれまでも地雷被害者のリハビリや、組織作りに力を貸してくれました。被害者の自立にはまだまだ支援が必要です。AARを通して支援をいただいた日本の方々に感謝の気持ちを伝えるとともに、今後も支援をお願いしたいです」と話しました。



東京事務局広報担当
太田 阿利佐

特設サイト「サヘル・ローズさんが出会ったウガンダ・難民キャンプの子どもたち」では、難民の子どもたちや地雷被害者との交流の様子、サヘルさんの想いなど、旅の詳細を動画を交えて御覧いただけます。



お買い物は 理想の社会を選ぶ 投票です

フェアトレード商品を手がけるシサム工房（有限会社／京都市）は、持続可能な「ものづくり」を通じて開発途上国の生産者と日本の消費者をつなぎ、新たな価値観を提案し続けています。また、ご寄付などを通じてAARの活動を応援して下さっています。1999年に創業した代表の水野泰平さんに、フェアトレードが持つ可能性、同社が目指すもの、日本社会に伝えたいメッセージを聞きました。

（聞き手・東京事務局兼関西担当中坪央暁）

フェアトレードで世界をつなぐ

シサム工房についてご紹介ください。

シサムとはアイヌの言葉で「よき隣人」という意味で、フェアトレードを通じて世界中の人々のより良い隣人になりたいという思いで名付けました。シサム工房は25年前、友人たちに手伝ってもらって、京都・百万遍に個人事業の小さな店を開いたのが始まり。アジア各国の生産者に発注したオリジナルの衣類や生活雑貨、コーヒーなどを取り扱ひ、現在は京都を拠点に大阪、神戸、東京の直営8店舗とオンラインショップ、卸売り事業を展開しています。

製品を作っているのはインド、ネパール、バングラデシュ、フィリピン、インドネシアのアジア5カ国の生産者たち。世界フェアトレード連盟（WFTO）に加盟する現地NGOを通じてやり取りしているほか、一部は「手仕事品」と呼んで直接注文する商品もあります。

社会的・経済的に弱い立場にある生産者を支えつつ、買い手側が対等な立場で取引するフェアトレード事業では、とにかく現地パートナーが大切です。連携している5カ国12団体のNGOは、生産管理だけでなく、生産者へのサポートを担います。例えば、女性が縫製作業に従事する場合、子どもの世話をする託児所を運営してくれています。

生き方を決めたアフリカの経験

開発途上国の貧困問題やフェアトレードに関心を持つようになったきっかけは？

同志社大学の学生時代、南アフリカのアパルトヘイト（人種隔離政策）のドキュメンタリー映画を観て衝撃を受けました。上映会を主催したグループに参加して、さまざまな社会運動に関わる人たちと接するうちに、世界中の人権や貧困の問題に広く関心を持つようになったんです。

インドに行ったり、アフリカを陸路旅したり、ひとりで世界を歩いてたっさんの人々に出会い、貧困の現実も目の当たりにしました。

そんな旅の中で、自分の生き方を決めた瞬間があるんです。アフリカ南部のレソト王国という小さな国の山の中を2週間、野宿しながら歩き回っていた時のこと。それまでは海外に行くこと、どこかに貧しい人たちを何とかしてあげたい、かわいそうだから助けてあげたいという気持ちがありました。

でも、めったに人に会わない山中を歩くうちに、自分のちっぽけさを感じるようになって。夕暮れ時、小さな村で食事の支度をしているのか、煙が上がっているのを見て、そこには「かわいそうな人たちが」暮らしているのではなくて、自分よりもずっとたくましい人たちが、当たり前前の暮らしをしているって、それこそ当たり前前のことを実感したんですね。その時、この人たちとより良い形につながった生き方をしたいと思いました。

大学院で南部アフリカ研究をしながら進路を考える中で、フェアトレードに関心を持ちました。修行のつもりでエスニック雑貨・食材を扱



シサム工房代表

水野泰平さん

う会社に就職し、バイヤー（仕入れ担当）としてアフリカやアジアで雑貨を買い付けたり、古材を集めて家具を作ったり。ものへのこだわりが増して、ものづくりがどんどん好きになっていきました。

4年間経験を積んで独立する時、10年後の自分が生き生きできる仕事を思い浮かべて、自分が良いなと思う空間でフェアトレード商品を提案し、誰もが刺激を受け合う交流の場を創りたいと考えて開業を決めました。

フェアトレードに甘えないこと

海外の生産者と日本の消費者をつなぐ仕事で心がけていることは？

フェアトレードというと、以前はチャリティのイメージが強かったのですが、僕は一貫して事業として取り組んできました。お客様はフェアトレード商品だからではなく、良いもの、気に入ったものだからこそ買ってください。生産者に対しては、経済的に弱い立場にある人たちが自立できるように、継続的に仕事を提供していく仕組みがフェアトレードです。

社内で徹底しているのは「フェアトレードに甘えない」ということ。不良品があったり、納期が遅れたりしても仕方ないでは済まされません。こちらでデザインしたものを発注し

て、現地で作ってもらうわけですが、20年前はお互い今のようなレベルじゃなかった。当初は日本ではとても通用しない雑な仕事もあり、根気強く説明したり、やり直したりを繰り返して、現地NGOも生産者も、私たち自身も一緒に成長してきたように思います。

その一方で、やはり大量生産・大量消費の規格品ではないので、お客様には同じ服でも必ずしも均質ではなく、一つひとつ個性があることを丁寧にお伝えするように心がけています。わずかな縫い目の乱れ、織ムラなどは手作りの味わいでもありますからね。

エシカルなメンズ服を打ち出す

新たな試みもあるとか。

フェアトレードつてすごい仕組みなのに、なぜなかなか広がらないのだろうと考えてきましたが、SDGs（持続可能な開発目標）の普及で少し変わって来たような気がします。2021年に始めた取り組みが「エシカルなメンズ服」の販売です。

フェアトレードを含むエシカル消費って、ソーシカルな意識の高い女性にまず響く傾向があり、男性にはとつきにくいところがあります。その点、SDGsは政府や企業が当事者なので、男性の意識も変わらざるを



フィリピン・ルソン島のパンダン（タコノキ）製品の生産地を訪問（前列右端が水野さん、2008年）

得ません。エシカルなファッションを楽しみたいというメンズの潜在的ニーズは確実に高まっています。

でも、僕自身が感じていたことでもありますが、男性にとってそういう選択肢が市場にまだまだ少ない。じゃあ、自分でも着たいものを作ろうと。選択肢を増やすのもシサムの役割だと考え、環境に配慮した独自デザインメンズ服をインダの生産者に発注して発売しました。天然素材のボタン、余り布を使用した裏地、ワンポイントの刺繍と細かいところにも遊び心が詰まっています。

遊び心もって楽しくお洒落に

フェアトレードを通じて伝えたい思いを聞かせてください。

シサム工房は「What you buy is what you vote」お買いものとはど

な社会に一票を投じるかということ」というスローガンを打ち出しています。例えば服を買う時、価格が安いとか、格好いい流行りものだから、商品を選ぶ物差しはたくさんあります。でも、もしかしたら知らず知らずのうちに、児童労働や環境破壊などの社会課題をそのまま買いつけてしまっているかも知れない。

何かを買うことは、その背景を含めて賛成票を投じるということ。

僕は貧困や差別、紛争、風習などのせいで未来の選択肢さえ持っていない子どもたちをなくしたいという想いで、賛成票を投じるようにしています。そんなふう一人ひとりが少しずつ意識するだけで、より良い社会になっていくんじゃないか。そんな流れを創るのもフェアトレードの社会的役割だと思っています。

だからといって、お買い物するのに貧困とか環境とか言われたら楽しくなくなっちゃいますよね。まずはお買い物を通じて、わくわくした気持ちを楽しんでもらいたい。フェアトレードが持つ前向きな力で、新たなライフスタイルを提案していく。あくまで遊び心で、楽しく、お洒落に。パーフェクトじゃなくていいので、シサムらしくやっていきたいと思っています。

相次ぐ人道危機へのご支援

1月の能登半島地震や2022年に始まったウクライナ危機への支援活動に、多くの個人と企業・団体の皆さまからご寄付をお寄せいただいているほか、支援物資の提供、輸送支援などのご協力も賜っております。ご支援に心より御礼申し上げます。個人情報に配慮し、100万円以上のご寄付、または100万円相当以上の物品寄付をお寄せいただいた企業・団体のみご紹介させていただきます。

能登半島地震

アウトドア義援隊

カクケイ株式会社

ゴールドマン・サックス・ギブズ

コストコホールセール野々市倉庫店

全国友の会

合同会社DIABLE

一般社団法人日本香港人協会

日本郵船株式会社

株式会社フェリシモ

フェリシモ基金事務局

株式会社フレクシェ

フロンティア株式会社

三菱食品株式会社

株式会社ミリオンインターナショナル

株式会社モンベル

ヤマトエスロン株式会社

l'oro株式会社

ウクライナ人道支援

KOA株式会社

(2023年11月16日～2024年2月15日、50音順)

2023 年末募金

あたたかなご支援が寄せられました

11月にお送りした年末募金のお願いに、のべ1,995名の皆さまから、2,821万2,363円のご寄付をいただきました。支援活動のために大切に使用させていただきます。



ウクライナ南部で支援物資の食料を受け取った家族

遺贈寄付をお寄せいただきました

永井 弓子さま (神奈川県)

(2023年10月16日～2024年2月15日)

お預かりした思いを大切に受け止めて、難民や子どもたち、障がいのある方々のために役立ててまいります。



株式会社虎屋にご提供いただいた羊かんを避難所にお届けしました



近年関心が高まっている遺贈寄付・相続財産寄付について、分かりやすく説明したパンフレットを刷新しました。ご希望の方は東京事務局までお気軽にお問い合わせください。

6/29 (土) 通常総会 & 活動報告会

2023年度の活動報告・決算、および2024年度の事業計画・予算などについて報告・決議を行う通常総会を6月29日(土)午後に行います。

また、総会後には「能登半島地震緊急支援報告会」を開催します。現地で活動にあたった職員が、現場の様子や支援の詳細を報告します。

正会員の皆さまには、別途ご案内をお送りします。活動報告会は会員以外の方もどなたでもご参加いただけます。詳細は5月下旬以降、ホームページにてお知らせいたします。

まるごとプロジェクト募金 御礼 & ご案内

AARが世界各地で実施するプロジェクトの資金を一括でご支援いただく「まるごとプロジェクト募金」。2023年度はザンビア、タジキスタン、ケニア、カンボジア、ミャンマー、ウガンダでのプロジェクトにご支援をいただきました。調整中の一部を除いて、順調にプロジェクトを進めております。ご協力に心より御礼申し上げます。また2024年度の募集も開始しましたので、同封のパンフレットまたはホームページを御覧ください。



チャリティグッズ価格および送料の改定

仕入れ価格や経費の高騰により、2024年4月よりチャリティグッズの価格および送料を改定します。また、昨年10月に始まったインボイス制度への円滑な対応のため、税抜・税込価格を併記いたします。何卒ご理解くださいますようお願い申し上げます。

詳細はチャリティショップを御覧いただくか、お電話（03-5423-4511）にてご確認ください。



ご購入・詳細は
チャリティショップ
から



書き損じはがき・切手キャンペーン 引き続きのご協力をお願いします

障がいのある方たちに車いすや歩行器を届けるため、カンボジアの車いす工場の運営を支援するキャンペーンに、約1万5,000枚の切手・ハガキが寄せられています。心より感謝申し上げます。目標まであと5万5,000枚が必要です。引き続きのご協力をお願い申し上げます。

募集期間：2024年4月30日まで

集めているもの：

- ①書き損じた年賀状・官製ハガキ
- ②未使用の年賀状・官製ハガキ
- ③未使用の切手

送付先：

〒141-0021 東京都品川区上大崎2-12-2ミズホビル7F
AAR Japan 物品募集係

現地の今を伝える。

ウクライナ危機から2年／トルコ地震から1年 報告会・写真展を開催

ウクライナ人道危機の発生から2年を目前にした2月3日、オンライン報告会「ウクライナは今」を開催しました。読売テレビ放送の山川友基氏をファシリテーターに迎え、AAR職員が現地の様子や人々の声、支援活動について報告。法人サポーターであるKOA株式会社（長野県）の向山浩正取締役が、地域のスポーツチームや高校との協働によるチャリティグッズの企画販売、AARと連携した講演会・写真展開催などの取り組みについて紹介。関西学院大学の学生である安達侑希氏には、所属するゼミのメンバーと実施した募金活動で得られた学びなどをお話いただきました。参加者からは「報道とは違う現地の生活を知ることができて良かった」「地域協働での取り組みが参考になった」という声が寄せられました。



左上から時計回りに、山川友基氏、向山浩正氏、安達侑希氏、AARの活動報告

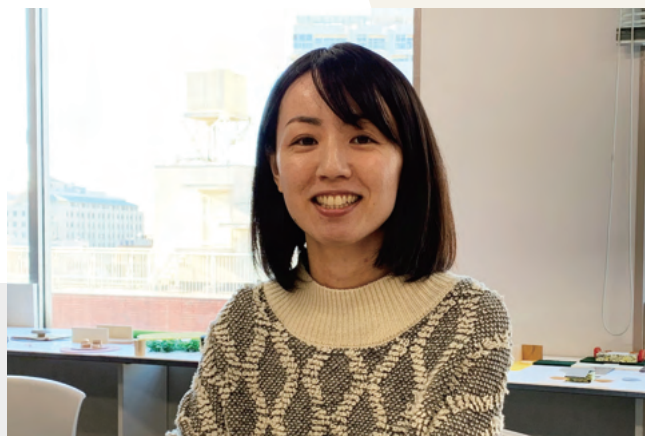


地震で壁が崩壊したモスク＝トルコ南東部アドゥヤマン県ベスニ地区で2023年12月11日（川畑嘉文撮影）

また、2023年2月に発生したトルコ地震の被災地の現状を伝える写真展「被災地は今」を、1月下旬に山形県寒河江市のさくらんぼ会館、2月上旬にモンベル御徒町店（東京都台東区）でそれぞれ開催しました。昨年12月に現地を訪れたフォトジャーナリスト川畑嘉文氏の写真を展示するとともに、両会場でトークイベントを開催。川畑氏が被災者の窮状や生活を伝えると、会場からは「被災地では行政による障がい者支援はあるのか」「関心を持ち続けるためにはどうしたらいいか」などの質問があり、活発な意見交換が行われました。

能登半島地震の現場で 感じた女性たちの痛み

東京事務局支援事業部
堀尾 麗華 HORIO Reika



—能登半島地震の緊急支援で被災地に入りました。

強烈な体験でした。東京に戻って数日経っても「あの人に荷物を届けないと」と思っていると目が覚めることがありました。発生直後の1月は富山県高岡市がAAR支援チームの拠点で、道路事情が悪く、朝5～6時に起きて支援物資を積み込み、雪道を車で5時間走って昼ごろやっと目的地に到着。数時間活動してまた5～6時間かけて富山に戻り、物資を調達して明日の打ち合わせをする毎日。睡眠は4～5時間。特に大変だったのはトイレ探しです。長期にわたって入浴できないことや、身だしなみを整えられないことを気にしている女性も多かった。長期間水のない生活がどれだけ大変か、特に女性の苦労を実感しました。

—現地に行かないと気付かないことが多かったのですね。

外国人技能実習生の方々は、水や電気がない環境ながら、雨水をためるなど知恵を絞っていて、日本人より生きる力を感じました。外国人は災害に弱く、無力のように伝えられることが多いですが、決してそれだけではありません。

—1995年の阪神大震災を経験したそうですね。

3歳の時、テレビで『セーラームーン』を見ていたらすごい揺れが来て、母がかばってくれたのを覚えています。その後、父が目が悪くしたこともあって障がい者と防災について関心を持ち、防災士の資格も取りました。大学時代に米国の分校で学んでいた時、東日本大震災が起きて衝撃を受け、米国からできることを模索し続

けたり、帰国後に被災地を訪問し、障がい者インクルーシブな防災について考えたりしていました。卒業時、障がい者支援に熱心だったAARにぜひ入りたいと応募しましたがダメでした(笑)。

新卒採用は難しいと知っての挑戦でした。やっぱりAARで働きたいという想いは消えず、「よし、経験を積んで絶対に入ってやる!」と英国の大学院に進学し、開発と障がいについて学びました。その後、国連児童基金 (UNICEF) ネパール事務所などを経て、2020年11月にAARに入りました。



能登半島地震被災地での外国人支援

—AARでこれからやりたいことは?

防災教育です。障がいの有無に関係なく、どう防災対策をしているかで生死が分かれるほどの違いがある。災害支援の経験を生かし、災害の前にできることを伝えていきたいと思っています。

—趣味は?

阪神タイガースのファンです。昨年リーグ優勝した翌日、うれしくて黄色と黒の阪神カラーの服で出勤したのに、誰も気付いてくれませんでした。フィギュアスケートの観戦も好きです。リンクで見ると氷の上を滑る音がとても迫力があるんですよ。支援もスケートも現場はやはり違います。

編集部より

能登半島地震の緊急支援は多くの個人や企業・団体の皆さまのご協力に支えられており、誰もが心をひとつにして被災地を応援していることを実感します。被災者の方々が一日も早く穏やかな日常生活を取り戻せるように支援活動を続けています。

AAR News

2024 Spring NO.486

次号は2024年7月上旬にお届け予定です。

特定非営利活動法人 難民を助ける会

〒141-0021 東京都品川区上大崎 2-12-2 ミズホビル7F

Tel.03-5423-4511 Fax.03-5423-4450

www.aarjapan.gr.jp



AAR Japan